



「声」の欄・投稿規定

★「声」の欄は読者の皆さんのお考えを、直接誌面に反映させるためのページです。皮膚病の診療に関する日ごろのご意見、新しいアイデア、ご提言などをお気軽に寄ってください。とくに日夜第一線で診療に活躍しておられる先生方からのご投稿を切望します。

★「声」の欄には、また皮膚病に関する“質疑応答”を取り上げます。お寄せいただいたご質問は、その方面の権威に依頼して適切な回答を用意し、誌上で発表いたします。とくに回答者を指名されても結構です。

★字数は一般のご投稿は1,200字以内、質問は600字以内を原則とします。

★ご投稿は郵送のほか、FAX（番号：03-6838-9222）とE-mail（アドレス：hifubyoh-shinryoh@kk-kyowa.co.jp）にても受け付けております。

★原稿には住所・氏名を明記していただきます。

「B細胞リンパ腫に合併し、消長を繰り返した毛包性ムチン沈着症」(Vol.40 11月号掲載)を読んで

このタイトルで本文を読み始め、多少の違和感を覚えた。臨床、組織ともにリンパ腫の特異疹で、毛包周囲にムチン沈着がみられたのは二次的なものである。頬部の結節を形成しているのは腫瘍細胞であるので、ムチン沈着症ではない。B細胞リンパ腫の皮疹であれば消長を繰り返すのも納得がいく。

Follicular mucinosisはprimaryとsecondaryなものに分かれ、primaryの臨床像はたいてい局面状を呈する。掲載例にみられたような、血液系悪性腫瘍に伴ってsecondaryに生じた丘疹・結節性病変をfollicular mucinosisと呼ぶかであるが、ムチノーシス(ムチン沈着症)はあくまで、ムチン沈着が結節、局面を形成するものであると考えたい。たとえばアミロイドーシスを考えたときに、痒みの強いアトピー性皮膚炎にも掻破刺激によってケラチノサイト由来のアミロイド蛋白が沈着することがしばしばある。典型的なアミロイド苔癬が下肢にあるなら両者の合併としてよいが、アトピー性皮膚炎の皮疹に二次的にアミロイドがみられたのなら、アミロイド沈着を伴ったアトピー性皮膚炎でよい。あるいは、基底細胞がんやBowen病で間質に二次的にアミロイド沈着がみられることがしばしばあるが、これをアミロイドーシスとはいわないであろう(secondary amyloidosisに分類されることはあるが)。

掲載例は、著者らがCLL/SLLの腫瘍細胞の浸潤と考えているので、毛包周囲にムチン沈着を認めたB細胞リンパ腫と読み替えるのがよいのではと思う。

ペンネーム 好きな言葉は情熱です
(東京都)

Trichophyton tonsuransの語源は？

病名や学名はラテン語命名が多い。このためラテン語がわかれば、いろいろな面白い発見もある。たとえば真菌なら*Trichophyton rubrum*の語源は培養したコロニーの裏側の赤い色(英語 red ラテン語 rub)から命名されたのは有名な話である。*Microsporum canis*(*M. canis*)はラテン語の犬(*canis*)に由来しているが、日本での*M. canis*の流行は戦後輸入されたペルシャ猫だそうなので、菌名は*canis*でも流行らせたのは猫だと知ると、何とはなしに微笑ましい。ちなみに狼(タイリクオオカミ)の学名は*Canis lupus*であり、*Lupus erythematoses*を「紅斑性『狼そう』」と訳するのはこれに関係している。しかし*Lupus nephritis*は「ループス腎炎」であり、本来の「lupus=狼」の字義は「狼そう」にしか残っていないといえる。

では、*Trichophyton tonsurans*(*T. tonsurans*)の名はどこからきているのだろうか。戦国時代に来日したフランシスコ会のルイス・フロイス神父は「日本人のちょんまげはわれわれの*tonsura*に似てい



る」と記録に残している。tonsuraとはキリスト教の神父の剃髪のこと、鉢巻状に毛髪を残して頭頂部を丸く剃る独特の髪型を意味する。聖フランシスコ・ザビエル神父の肖像画を思い出していただければわかりやすい。剃髪はもともと古代キリスト教にはない習慣だったが、近隣のエジプトの神官の影響を受けて導入されたい。宗教改革家のマルチン・ルターもtonsuraの肖像画が残っていて、中世ヨーロッパでは一般的な髪型だったようである。このtonsura、最近まで修道院などに残っていたそうだが、1970年代に公式に廃止された。

なぜキリスト教の剃髪が白癬菌の菌種名に命名されたのだろうか？ 素人考えであるが、*T. tonsurans*感染症は頭部に好発してしばしば脱毛巣をきたすので、そのあたりからの連想なのではない

だろうか。

*T. tonsurans*は2000年頃から日本でも格闘技系スポーツの感染症として知られるようになった。一方、レスリングや柔道など密着系格闘技の世界では、接触感染する皮膚病を昔から「マット菌」と呼んできた。青森でも山形でも「マット菌」は白癬に限らず、ヘルペスウイルスによるカボジ発疹症や伝染性膿痂疹など多種の表在性感染症を含んだ総称である。最近「マット菌＝*T. tonsurans*」とみなす考え方が主流になりつつあるようだが、*T. tonsurans*が日本に伝播する前から「マット菌」の名称はあったのだから、一元的に説明してしまうことに違和感をおぼえるのは私だけだろうか。

石川博康

(八戸市・湊高台皮膚科)